

## 第二コリント書における神の問題

原 口 尚 彰

**抄録：**第二コリント書において、パウロは一般的、抽象的に神の問題を論じるのではなく、キリストを通しての神の業という側面に集中している。神の救いの約束が、キリストにあって「然り」となったことに神の真実は現れる（コリ 1：19・20）。神はキリストを通して世界を御自身と和解させ、和解の言葉を宣教者に委ねた（4：18・19）。パウロの思考は常にキリスト論的、救済論的、宣教論的である。

**キーワード：**パウロ、神、第二コリント書、キリスト論、救済論、宣教論

### 問題の所在

新約神学においてイエスの宣教やキリスト論や救済論（義認論、十字架論、復活論）や終末論を論じることは多いが、神の問題を論じることは少ない<sup>(1)</sup>。しかし、新約神学が「神学」の一部門である以上、新約聖書における神の問題を深く考察することは避けて通ることは出来ない課題である。新約聖書は体系的な神についての教説を展開しているのではなく、旧約・ユダヤ教の神理解を前提にした上で、折に触れて神の業について言及するに留まる。そこで、新約聖書における神についての考察は、新約各書が神についてどのように証言しているかということを出発点とし、その相互関係を考察し、新約聖書が全体として神をどう理解しているかということに到る道筋を辿る。

本研究は新約聖書における神の問題を考察する一環として、パウロの神理解を問うものである。パウロの神理解にとって重要な主題は、被造世界を通しての神認識の可能性の問題や（ロマ 1：18・25）、イスラエルの救済史と神の真実の問題や（ロマ 9：1・11：36）、キリストを通しての神の義の啓示や（ロマ 3：21・26）、神の知恵・力としての十字架（コリ 1：18・25）、神の和解の業（コ

リ 5：18・21）等である<sup>(2)</sup>。パウロにおいて神を論じることは、多くの場合、キリストを通しての神の業を論じることとなり、キリスト論と密接に結び付いているが、それは神論がキリスト論に吸収されてしまうことを意味せず、キリストにおける神の問題を問うことは可能であるし、またそうしなければならない。

パウロの神理解を調べるための資料は、真正パウロ書簡に数えられる七つの書簡（ロマ、第一、第二コリント、ガラテヤ、フィリピ、第一テサロニケ、フィレモン）に書かれているパウロの言葉である。第一コリント書における神や、ロマ書における神は別の機会に論じることになっているので<sup>(3)</sup>、本研究は第二コリント書における神の問題を採り上げて考察する。この書簡の4章においてパウロは、創造論と宣教論とを結合させた独自の議論を展開し（コリ 4：5・12）、5章においては宣教の務めを通してなされる神の和解の業を論じており、パウロの神理解にとり重要と考えられるからである（5：18・21）。

## 1. 神を論じる前提としての神の臨在

パウロ書簡は宣教者であるパウロが様々な教会の信徒たちに対して伝道・牧会上の必要に応じて書き送った手紙であるので、パウロは受信者に対して神の存在を改めて論じることはせず、むしろ神が存在し、教会に臨在することを前提に言葉を語る。第二コリント書の場合も他の書簡と同様に、書簡の導入部にヘレニズム教会の礼拝に由来する頌栄句を用いて、恵みと平和の起源として父なる神と主イエス・キリストに言及する（コリ1:2; さらに、ロマ1:7; コリ1:3; ガラ1:3; フィリ1:3; テサ1:1; フィレ1:3を参照）<sup>(4)</sup>。他方、パウロは書簡の結びの部分で、「平和の神」の臨在を祈願する祝祷句を用いている（コリ13:11; さらに、ロマ15:33; フィリ4:9; テサ5:23を参照）。こうして書簡の枠組みを形成する書簡の導入部と結びの部分で、頌栄句と祝祷句を用いることで、この書簡全体が典礼的な構造を持ち、神の臨在ということが、書簡本体部分の言葉が語られる前提を形成している。

生ける神の臨在は（コリ3:3; 6:16; さらに、ロマ9:26; テサ1:9も参照）、信徒たちの心に与えられる聖霊を通して経験可能となる（コリ3:3; 5:5さらに、ロマ8:15; ガラ3:1-5; 4:6も参照）。神の霊が信仰を通して心に与えられるということは、書簡の発信人であるパウロと受信人であるコリント人たちの間で争う必要がない共通認識であった。パウロはこの経験的事実に基づいて、信仰者は生ける神の霊が宿る「神の宮」と述べ、倫理的勧告の根拠としている（コリ6:16; さらに、ロマ8:11; コリ3:16も参照、）。

## 2. 救いの保証としての神の真実（信実）

コリ1:18において、パウロは神の真実（信実）ということに言及する（コリ1:9; 10:13; テサ5:24; ヘブ10:23を参照）。神の真実（信実）は旧約聖書に由来する主題であり、新約文書がこ

の概念に言及する時は旧約的理解を前提にキリスト論的な考察を加えている。神の真実性についての議論は、旧約聖書においては契約神学的な基礎を持っている<sup>(5)</sup>。申命記において、神はイスラエルの父祖たちに与えた契約や（申7:9; 32:4）、約束の言葉を（詩145[144]:13 LXX）守るので、神は真実である（יְהוָה אֱמֶת）とされる。また、第二イザヤは、真実の神がイスラエルを選んだことの内に、イスラエルの救いの希望の根拠を見ている（イザ49:7-9）。他方、パウロは既に第一コリント書において、救いの約束を成就する神の真実を信じる者が救われる希望について語っている（コリ1:9; 10:13）。従って、神の真実という主題自体は受信人であるコリント人たちの耳に新しいものではなく、彼らには既知の事柄であった<sup>(6)</sup>。

コリ1:18の特殊なところは、神の真実（信実）を述べる前半部に、宣教者であるパウロらがコリント人たちに語った宣教の言葉が曖昧ではないことを述べる後半部が続いていることである（1:18b「あなた方に対する私たちの言葉は、『然り』であり『否』であるというようなものではない」）。パウロが宣教の言葉の真実性を論じるに到った背景は、先ずコリントへ行き、そこからマケドニアへ出掛け、再度、コリントへ戻ってから、ユダヤへ向かうという当初の計画が、何らかの事情で変更されたために、コリント人たちの間にパウロらに対する不信が生じたためである（1:15-17）。そのことを知ったパウロは、旅程変更について弁明しつつ、宣教の言葉の本質論へ移行し、宣教の言葉の真実性を、約束したことを必ず成就する神の真実に求めている。パウロらによって宣べ伝えられる神の子キリストにおいて、神の「然り」が現実となった（1:19）。つまり、神の救いの約束がキリストによって成就し（「然り」となり）、パウロらは神の栄光のためにアーメンと唱えた（1:20）。真実の神は、救いの証印を押し、信じる者の心に保証（ῥῆμα）として聖霊を与えたのであった（1:22; 5:5）。修辭的状況から生じた旅程変更の弁明は、いつしか宣教の言葉の真実

性の弁明に移行し、キリストにおいて成就した神の約束の言葉の真実性を述べる結果となった。パウロの神学的思考は目前の修辭的状況に対応した状況的発言を端緒として、その根底にあるより普遍的な事柄へと及んで行く構造を持っていると言える。

### 3. 希望の根拠としての神の力 ( コリ 1 : 3 - 11 )

コリント書冒頭の神への賛美の部分においては( コリ 1 : 3 - 11 ), 神が与える慰め・励まし( *παράκλησις* )が中心的な主題となっている<sup>(7)</sup>。ギリシア語名詞 *παράκλησις* は、「慰め」、「励まし」、「勧め」等を意味する多義的な言葉である<sup>(8)</sup>。コリ 1 : 3 - 11 において、名詞 *παράκλησις* は 6 回( 1 : 3 , 4 , 5 , 6 [ 2 回 ] , 7 ) 動詞 *παράκλησας* は 5 回使用されている( 1 : 4 [ 3 回 ] , 6 , 8 )。パウロは、神を「哀れみの父であり、あらゆる慰めの神」と規定し( 1 : 3 ), 神は苦難の中にある者を慰め・励ます力があるとする。こうした神理解に立脚して、パウロらは極度の艱難の中にあって神に慰められ、同様な状況の中にある者たちを慰めることが出来る( 1 : 4 )。キリストの苦しみが増し加わる時に、キリストを通して慰めも増し加わるからであり( 1 : 5 ), 著者のパウロと読者のコリント人たちとの間には、キリストの苦しみと慰めに共に与る者としての連帯が成立して来る( 1 : 6 - 7 )。

神が与える慰め・励ましということをこれ程集中的に論じる例は他にはなく、このことは第二コリント書固有の特色になっている。これはパウロがエフェソでローマの官憲に弾圧を受け( コリ 15 : 32; フィリ 1 : 12 - 14 ), 獄中で死の覚悟すら行った後に( コリ 1 : 9; フィリ 1 : 20 ), 神に救出された特別な事情が反映している( コリ 1 : 10 )。キリストを死人の中から甦らせた神は、死の危険から人を救う力がある方であり( 13 : 4 ), また、終わりの時に死者を復活させる力を持つ方である( 1 : 9; 4 : 14 )。死を覚悟する極限

状態の中でもパウロらが希望を持つことが出来た根拠は、死者を復活させる神の力への信頼にある( 1 : 9; さらに、テサ 5 : 13 - 14 も参照 )。ここでもパウロの思考は苦難の中での希望という状況的発言から、キリスト教信仰の根幹をなす死者を復活させる神という最初期の教会に遡る神理解の確認に達している( ロマ 4 : 17; 8 : 11; コリ 6 : 14; 15 : 15; コリ 1 : 1; ガラ 1 : 1; テサ 1 : 10 他 )。

### 4. 神の創造と宣教論

#### ( 1 ) 光の創造と宣教

パウロは異邦人伝道の常として、神は唯一であり( コリ 8 : 6 ), 天地の創造主であることをコリント人たちに語っていたと推定される( 使 14 : 15 - 17; 17 : 22 - 31 を参照 )<sup>(9)</sup>。彼は第一コリント書において、コリント人たちが創世記の創造物語を知っていることを前提に、人類の始祖アダムの創造に言及した( コリ 15 : 45 - 49; 創 2 : 6 - 7 )。パウロによれば、天地創造に際して最初の人アダムを創った神は( 創 2 : 6 - 7 ), 第二のアダムであるキリストを霊の体に復活させた( コリ 15 : 20 - 28, 42 - 49 )。キリストの復活は神の業であり、信仰者が終末の時に神の力によって復活する希望の根拠となる( コリ 6 : 14; 15 : 15 )。最初の人アダムの罪によって死が世界に入ったように、キリストによって復活が世にもたらされた( コリ 15 : 21; さらに、ロマ 5 : 17 も参照 )。キリストは初穂( *ἀπαρχή* )として甦ったのであり、すべての者はキリストにあって死者の復活の希望を持つ( コリ 15 : 22 )。同様な、アダムーキリスト予型論はロマ書にも見られる( ロマ 5 : 12 - 21 )。

コリ 4 : 4 - 6 においてパウロは、創世記冒頭の光の創造の記事を受信人であるコリント人たちが良く知っていることを前提に再解釈を加え( 創 1 : 3 ), 福音宣教を通して輝き出る「キリストの栄光の福音の光」について語っている( コリ 4 : 4 )<sup>(10)</sup>。ここには、人を照らす光というイザヤ書 9 章 1 節の主題も響いているであろう。ここで言及

されている光は、一部の釈義家たちが主張するような<sup>(11)</sup>、使徒言行録が描くところの、ダマスコ途上のパウロに対して復活のキリストが顕現した際に天から照らした光ではない(使9:3; 22:6, 11; 26:13)。「キリストの栄光の福音の光」とは物理的光ではなく、むしろ信じる者たちに「神の似姿」であるキリストの顔のうちに神の栄光を認識させる働きのことを比喩的に表現している(4:6)<sup>(12)</sup>。宣教活動は光の創造者である神が、キリストの福音の言葉を通して与えられる真理を認識する光を輝かせることであり、宣教者は神の創造の業に参与すると考えられている(4:6)。宣教の言葉は信仰の対象であるキリストを提示するのみならず、キリストの真理を認識させる能力を与えることになる<sup>(13)</sup>。

光は真理の象徴としてしばしば新約聖書に用いられるシンボルである。共観福音書には、キリストを闇を照らす光に喩えた部分がある(マタ4:16; ルカ2:32)。山上の説教では、イエスの弟子たちが「世の光」と呼ばれる(マタ5:14, 16)。ヨハネによる福音書は、一貫してキリストを光と呼び、この世の闇と対照させる(ヨハ1:4, 5, 7-9; 3:19-21; 8:12; 9:5; 12:46)。これに対し、コリ4:4-6は光のシンボリズムを福音宣教と結び付けたところにその特色を持つ。パウロはここで宣教の言葉を聞いて信じることと、ケリュグマを通して啓示されるキリストの真理を認識する能力を与えられることを同時的な過程と考えている<sup>(14)</sup>。つまり、知ることは信じることであり、信じることは知ることなる。このようにパウロが考えるのは、宣教の言葉を通して宣べ伝えられるキリストの十字架に神の救いの業を見ることは、自然の人間が持つ理性には自明ではないからである<sup>(15)</sup>。パウロによれば、十字架に架けられたキリストを救い主として宣べ伝える十字架の言葉は、神が自己を啓示する神の知恵であり、信じる者を救いへと導く神の力である(コリ1:18, 21, 24, 25, 30)。十字架の言葉が神の力であることは、信じて救われる者には理解されるが、信じず、救われていない者には、愚かなものにしか見えない

のである。パウロは、キリストの十字架を救いの根拠とするだけでなく、神について知る認識を与える手段としている<sup>(16)</sup>。パウロにおいて十字架論は救済論の問題であると共に、神が自己を啓示する啓示論と神を知る認識論の問題となっていると言える。福音の言葉の真理は信じない人々に対しては覆われており、パウロの理解によれば、この世の支配者であるサタンが彼らの心の目を眩ませて、「キリストの栄光の福音の光」を見えなくしている(コリ4:4)。宣教の言葉を通して働く神の創造の力は、言葉を受け入れ信じるものには働くが、信じない者には働かない。この事情は、福音は信じる者に対して救いを得させる神の力であり(ロマ1:16)、十字架の言葉が、信じて救われる者に対しては神の知恵、神の力であるが、信じない者、つまり、滅ぶべき者に対しては愚かである事情と並行している(コリ1:18)。パウロによれば理性に基づくこの世の知恵はキリストの十字架の内に神の知恵と力を認識することが出来なかった(コリ1:21; 2:8)。自然世界に内在する法則性を探求し、歴史世界の出来事を分析するこの世の知恵には、十字架に救いの出来事を見る可能性は開けていなかった。この世の知恵がキリストの十字架の救済論意義を認識することが出来ないのは、この出来事が従来の世界の常識を越えた全く新しい終末的出来事であるからである。このことは、神を認識する根拠は人間の知性ではなく、神の自己啓示にあることを示している。

## (2) 復活を与える神と宣教者の希望

パウロの理解によれば、宣教者は神の力を担う福音の宝を納めた「土の器」である(コリ4:7)。宣教者はこのような輝かしい使命とは裏腹に反対や迫害を受ける苦難の運命を背負っている。彼は、「イエスの命が私たちの体に顕されるために、イエスの死を背負っている」と述べる(4:10)。宣教活動に伴う苦難を通して宣教者は、イエスが経た苦難と死とに与る。しかし、イエスが死後三日目に復活したように、宣教者もまた死からの甦りの希望を与えられる(4:10-11)。パウロ



はここで、神はイエス・キリストを死者の中から甦らせた方(ὁ ῥυτίζων)であると規定する初代教会の神理解に依拠しながら、議論を展開する(ロマ4:24; 8:11; ガラ1:1; エフェ1:20; コロ2:12; ペト1:21他を参照<sup>17)</sup>)。パウロによればキリストの復活は創造主である神の業であり、信仰者は終末の時に神の力によって復活する希望を持つ(コリ6:14; 15:15も参照)。常に死の危険に晒されている宣教者の希望も、「主イエスを復活させた方が、イエスと共に私たちを復活させる」ということにある(コリ4:14)。人間の究極的救いの希望の根拠は、結局のところ無から有を創造し、死者を復活させる創造主の力にあることになる(ロマ4:17)。ここでは、宣教論と救済論を支える思想的根拠として創造論が機能している。

## 5. 神の和解の業と宣教者の務め (コリ5:18-20)

コリ5:18-20は神が世界を御自身と和解させる和解の業について語る<sup>(18)</sup>。ここで用いられている「和解する(ἡμιλιώμεθα)」<sup>(19)</sup>、或いは、「和解(ἡμιλιώμεθα)」という言葉は、もともとヘレニズム世界で外交関係について用いられた用語であるが、ヘレニズム・ユダヤ教によって神とイスラエルとの関係の描写に転用された来歴を持つ(マカ1:5; 5:20; 7:32-33; 8:29を参照<sup>19)</sup>)。新約聖書において「和解」語群が神と人との関係に適用された使用例を見ると、動詞形(ἡμιλιώμεθα)も(ロマ5:10[2回] コリ5:18,19,20)その複合形(ἡμιλιώμεθα)も(エフェ2:16; コロ1:20)、名詞形(ἡμιλιώμεθα)も(ロマ5:11; 11:15; コリ5:18,19)、パウロ書簡または第二パウロ書簡に限定されている<sup>(20)</sup>。こうした事情であるから、コリ5:18-20において、神と人との和解の表象が使用されていることの背景に伝承の存在を推定するよりは<sup>(21)</sup>、パウロの創造的思考と神学的強調を読み取るべきである<sup>(22)</sup>。パウロはここで神を和解の神と規定しているのである。

神と世界の和解が必要なのは、神と世界との間

に敵対関係が存在し(ロマ5:10; 8:7; 11:28)、神との平和が存在しないからである。神と世界の間に敵対関係が生じたのは、人間が罪によって神との正しい関係を失い、神の怒りのもとに置かれたからである。この敵対関係を解消し、神と世界との間に平和を回復する課題が生じる。初期ユダヤ教は、怒れる神に対して祈りによって働きかけて赦しを請い、和解を実現しようとする(マカ1:5; 5:20; 7:32-33; 8:29; ヨセフス『古代誌』6.143を参照)。これに対して、キリストを通しての神の和解の業が必要であったことをパウロは強調する(コリ5:18-19)。それは、キリストが罪人の代わりに死ぬということを意味する。このキリストの自己犠牲的行為は、神の側から言えば、愛する御子をこの世に遣わし、その死を通して罪を赦し、和解を達成する神の業であった(ロマ8:3,32)。

コリ5:21は、和解論を義認論と結合させ、私たちがキリストにあって神の義となるために、「罪を知らない方を私たちのために死に定めた」と述べる。これはキリストの死によって、罪人の罪とキリストの義が交換されることによって、罪人が神の前に義とされ、神との関係が回復する可能性を意味する。

他方、神の和解の業の成就のためには、神の和解のイニシアティブを人間の側が受け入れることが必要である。人々がこのイニシアティブを受け入れるためには、彼らは先ず宣教の言葉を通して、キリストにおける神の和解の業について聞くことが必要である(ロマ10:14-21)。宣教者たちの使命は「和解の務め(ἡμιλιώμεθα)」であり(5:18b)、福音宣教の言葉は「和解の言葉(ὁ ῥυτίζων ἡμιλιώμεθα)」である(5:19b)。宣教者たちが、キリストにおける神の和解の業を人々に対して語り、人々がそれを受け入れて回心することを通して、神と人との平和が実現することになる。

## 6. 結論と展望

(1) 第二コリント書において、パウロは一般的、抽象的に神の問題を論じるのではなく、キリストを通しての神の業という側面に集中している。神の救いの約束が、キリストにあって「然り」となったことに、神の真実は現れる(コリ1:19-20)。また、宣教者は死の危険が迫る極限状態の中でも、キリストを死人の中から復活させた神に希望を寄せることが出来る(1:9; 4:14)。神はキリストを通して世界を御自身と和解させ、和解の言葉を宣教者に委ねた(4:18-19)。パウロの神についての思考は、常にキリスト論的考察と結び付いている。

(2) 第二コリント書においてパウロは、人間の救いに関わる限りに関して神について語る。神の約束がキリストにおいて「然り」となるとは、救いが成就することに外ならない(コリ1:19-20)。パウロは、アジア州における死をも覚悟した窮状の中から神によって救われた(1:10)。キリストの苦難に与る宣教者は、キリストを死人の中から復活させた神が、自分たちを復活させてくれるであろうという希望を持つ(1:9; 4:10-14)。パウロの神についての思考は一貫して救済論的であり、信じる者の救いを問題にする。

(3) コリ5:18-20において、神と人との和解の表象が使用されていることは、パウロの固有の神学的強調であり、パウロはここで神を和解の神と規定していると言える。

(4) 第二コリント書における神についてのパウロの発言は、宣教の主題と結び付いている場合が多い。例えば、冒頭の神の賛美において、彼は神が与える慰め・励ましということを強調するが、それは特に、宣教者が宣教活動を通して与えられた苦難における慰め・励ましである(1:3-7)。また、コリ1:18-20において、神の真実を問題にするが、それはパウロら宣教者が語る宣教の言葉の真実と結び付いている。4章において、パウロは創1:3の光の創造の記事を再解釈し、宣教の言葉を通して世に輝く、「キリストの栄光の福

音の光」について語るし(4:4-6)、キリストの死と復活に宣教者が与ると述べる(4:10-14)。他方、神がキリストを通して世界を御自身と和解させる和解の業について語る時、パウロは宣教者に託されている「和解の務め」について語ることを忘れない(5:18-21)。この書簡において神についての思考が宣教論と強く結び付いていることには理由がある。

それは第一に、パウロがアジア州で遭遇した迫害と苦難とそこからの救出の体験を通して、宣教者の実存と究極的希望について深く考える機会を与えられたことであろう(コリ1:3-11)。第二に、パウロが去った後のコリントに福音理解を異にする宣教者たちが訪れて宣教活動を行い、パウロを攻撃したので、彼はコリント人たちに真正な宣教の言葉と宣教者の在り方について正しい理解を提示する必要が生じた。これらの宣教者たちは、パウロが宣べ伝えたイエス・キリストとは、「違ったイエス」を宣べ伝える。彼らは聖霊とは「違った霊」に導かれていた(11:4; さらに、ガラ1:6-9を参照)。パウロは彼らを徹底的に否定的に描き、「偽使徒」、「邪悪な働き人」(11:13)、「義の奉仕者にサタンが変装した者たち」(11:14-15)と呼んでいる。彼らはユダヤ人の宣教者であり、「アブラハムの子孫」であることを強調し、自らを「キリストに仕える者」と称し、宣教者としての苦難をくぐり抜けたことを誇る(11:24-30)。彼らは弁論に優れ(11:5-6)、奇跡を行うことを彼らの使徒職が真正であることのしるしとした(11:12)。彼らは最初期の宣教者たちのように(マタ10:5-15; マコ6:7-13; ルカ9:1-6; 10:1-12)、働くことをせず伝道に専念(コリ11:7-8)。また彼らは有力な教会の推薦状を携帯していた(3:1-3)<sup>(23)</sup>。これに対して、パウロは、自らを新しい契約に仕える奉仕者として、古い契約に仕える務めとの断絶を強調し(3:4-4:6)、キリストの苦難と死を身に負うことを述べ、イエスを死から復活させた神の力への信仰を強調する(4:7-15)。パウロの思考は状況性と普遍性の緊張の下に成り立っているが、第二

コリント書においては、対立する宣教者による攻撃と教会の混乱という危機的事態から、神の宣教の本質と宣教者の存在の意味を深く考察することとなった。

註

- (1) その数少ない例外が, J. Coppens (ed.), *La notion biblique de Dieu: Le Dieu de la Bible et le Dieu des philosophes* (BETHL 41; Louvain: Louvain University Press, 1976); P.-G. Klumbies, *Die Rede von Gott bei Paulus in ihrem zeitgeschichtlichen Kontext* (FRLANT 155; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992); A. Lindemann, “Die Rede von Gott in der paulinischen Theologie,” ders., *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr, 1999) 9-26; N. Richardson, *God in the New Testament* (London: Epworth, 1999); ders., *Paul’s Language about God* (JSNTSup 99; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994) である。
- (2) J. M. Bassler, “God in the NT,” *ABD* 2.1049-50; H. D. Betz, “ $\epsilon\sigma\tau\iota$ ,” *EWNT* 2.351; C. Demke, “Gott . Neues Testament,” *TRE* 13.646-647; H. Kleinknecht et al., “ $\epsilon\sigma\tau\iota$ ,” *ThWNT* 23.65-120; A. Lindemann, “Gott. . Neues Testament,” *RGK*<sup>4</sup> 4.1106 を参照。
- (3) 拙論「第一コリント書における神の問題」『教会と神学』第41号(2005年)63-81頁,「ロマ書1章18-25節における神の問題」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第24号(2006年)掲載予定を参照。
- (4) 詳しい分析は, 拙稿「真正パウロ書簡導入部の修辭学的分析」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第18号(2000年)25-43頁を参照。
- (5) 拙稿「パウロにおける  $\epsilon\sigma\tau\iota$  /  $\epsilon\sigma\tau\iota$ 」『パウロの宣教』教文館, 1998年203-207頁を参照。
- (6) 拙論「第一コリント書における神の問題」『教会と神学』第41号(2005年)63-81頁を参照。
- (7) コリ1:3-7の詳しい釈義的分析は, P. E. Hughes, *The Second Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1962) 9-24; C. K. Barrett, *The Second Epistle to the Corinthians* (London: Black, 1973) 56-68; P. Barnet, *The Second Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1997) 65-92; L. L. Belleville, *2 Corinthians* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1996) 53-60; F. F. Bruce, *1 & 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1971) 178-180; R. Bultmann, *Der zweite Brief an die Korinther* (2. Aufl.; herausgegeben von E. Dinkler; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987) 25-197; Barnett, 218-232; Belleville, 113-119; Bruce, 130-138; Bultmann, *Der zweite Brief an die Korinther*, 106-112; Furnish, 252-254; Garland, 210-218; Grässer, 1.152-160; Harris, 327-337; Hughes, 124-134; Lambrecht, 65-71; Lang, 277-279; Lietzmann, 115; Martin, 74-81; Plummer, 114-122; Thrall, 1.305-320; Witherington, 385-391; Wolff, 85-88; J.-F. Collange, *Énigmes de la deuxième Épître de Paul aux Corinthiens: Étude exegetique de 2 Cor. 2, 14-7, 4* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972) 126-143 を参照。
- (8) このギリシア語の語学的分析については, Bauer-Aland, 1249-1250; J. Thomas, “ $\epsilon\sigma\tau\iota$  /  $\epsilon\sigma\tau\iota$ ,” *EWNT* 3.54-64; O. Schmitz/G. Stählin, “ $\epsilon\sigma\tau\iota$ ,” *ThWNT* 5.771-798; 拙稿「パウロにおける新しいタイプの書簡の創造」『パウロの宣教』教文館, 1998年33-34頁を参照。
- (9) R. Bultmann, *Theologie des Neuen Testaments* (9. Aufl. durchgesehen und ergänzt v. O. Merk; Tübingen: Mohr, 1984) 69-73 を参照。
- (10) コリ4:4-6の詳しい釈義的分析は, Barrett, 195-197; Barnett, 218-232; Belleville, 113-119; Bruce, 130-138; Bultmann, *Der zweite Brief an die Korinther*, 106-112; Furnish, 252-254; Garland, 210-218; Grässer, 1.152-160; Harris, 327-337; Hughes, 124-134; Lambrecht, 65-71; Lang, 277-279; Lietzmann, 115; Martin, 74-81; Plummer, 114-122; Thrall, 1.305-320; Witherington, 385-391; Wolff, 85-88; J.-F. Collange, *Énigmes de la deuxième Épître de Paul aux Corinthiens: Étude exegetique de 2 Cor. 2, 14-7, 4* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972) 126-143 を参照。
- (11) Plummer, 120-121; S. Kim, “2 Cor. 5:11-21 and the Origin of Paul’s Concept of ‘Reconciliation’,” *NovTest* 39 (1997) 369.

- (12) Furnish, 250-251; Thrall, 1.316-318;  
 (13) Lietzmann, 115; Thrall, 1.317-318; Grässer, 1.157; Bultmann, 110-111.  
 (14) 拙稿「第一コリント書における神の問題」『教会と神学』第41号(2005年)63・81頁を参照。  
 (15) 同上。  
 (16) Thieselton, 158; Vos, 63.  
 (17) O. Hofius, *Paulusstuden* (WUNT 51; 2. Aufl.; Tübingen: Mohr, 1994) 2 を参照。  
 (18) コリ5: 18-20の詳しい釈義については, Lietzmann, 126-127; Plummer, 181-186; Bultmann, *Der zweite Brief an die Korinther*, 159-166; Bruce, 209-210; Barrett, 175-179; Furnish, 333-337; Hofius, 1-14; Martin, 152-158; Belleville, 155-158; Wolff, 128-137; Thrall, 1.429-439; Garland, 288-300; Harris, 435-449 を参照。  
 (19) C. Breytenbach, *Versöhnung. Eine Studie zur paulinischen Soteriologie* (WMANT60; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989) 40-83; U. Wilckens, *Theologie des Neuen Testaments* (Bd.1/1-3; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002-2005) 1/3.121 を参照。  
 (20) この語群の語学的分析については, Bauer-Aland, 841; F. Büchsel, “ ” *ThWNT* 1.252-260; H. Merkel, “ ” *EWNT* 2.644-650 を参照。  
 (21) E. Käsemann, “Erwägungen zum Stichwort ‘Versöhnungslehre im Neuen Testament’,” in *Zeit und Geschichte* (FS. R. Bultmann; ed. E. Dinkler; Tübingen: Mohr, 1964) 47-59; Furnish, 334; Martin, 152; Grässer, 1.218; Breytenbach, 118-119.  
 (22) Lambrecht, 104-105; Hofius, 2; Kim, 362-363.  
 (23) D. Georgi, *The Opponents of Paul in Second Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1987); 拙著『新約聖書概説』教文館, 2004年, 106-107頁を参照。

## 文献表

### a. 注解書

- Barrett, C. K. *The Second Epistle to the Corinthians* (London: Black, 1973).  
 Barnet, P. *The Second Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1997).  
 Belleville, L. L. *2 Corinthians* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1996).  
 Bruce, F. F. *1 & 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1971).  
 Bultmann, R. *Der zweite Brief an die Korinther* (2. Aufl.; herausgegeben von E. Dinkler; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987).  
 Furnish, V. *Corinthians* (Garden City, NY: Doubleday, 1984).  
 Garland, D. *2 Corinthians* (Nashville, TN: Broadman &

Holman, 1999).

- Grässer, E. *Der zweite Brief an die Korinther* (OTKNT 8/1-2; 2 Bände.; Gütersloh: G. Mohn, 2002-2005).  
 Harris, M. J. *The Second Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 2005).  
 Hering, J. *La seconde épître de Saint Paul aux Corinthiens* (Neuchâtel: Delachaux & Nestle, 1958).  
 Hughes, P. E. *The Second Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1962).  
 Lambrecht, J. *2 Corinthians* (Sacra Pagina 8; Collegeville, MN: The Liturgical Press, 1999).  
 Lang, F. *Die Briefe an die Korinther* (NTD 7; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986).  
 Lietzmann, H. *Der erste Brief an die Korinther* / (HbNT 9; 5. Aufl; Tübingen: J. C. B. Mohr, 1969).  
 Martin, R. *2 Corinthians* (WBC; Waco, TX: Word, 1986).  
 Plummer, A. *A Critical and Exegetical Commentary on the Second Epistle to the Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1911).  
 Schelkle, K. H. *Der zweite Brief an die Korinther* (Düsseldorf: Patmos, 1984).  
 Thrall, M. *A Critical and Exegetical Commentary on the Second Epistle to the Corinthians* (2 vols; Edinburgh: T. & T. Clark, 1994-2000).  
 Windisch, H. *Der zweite Brief an die Korinther* (9.Aufl.; KEK; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1924).  
 Witherington, B. *Conflict & Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995).  
 Wolff, C. *Der zweite Brief an die Korinther* (ThHKNT 8; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1989).

### b. 個別研究

- Aejmelaeus, L. *Die Schwachheit als Waffe. Die Argumentation des Paulus im Tränenbrief (2.Kor.10-13)* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2000).  
 Bassler, J. M. “God in the NT,” *ABD* 2.1049-1055.  
 Beker, J. Ch. *Paul the Apostle: The Triumph of God in Life and Thought* (Philadelphia: Fortress, 1980).  
 Berger, K. *Theologiegeschichte des Urchristentums* (2. Aufl.; Tübingen: Francke, 1995).  
 Betz, Hans Dieter, “ ” *EWNT* 2.346-352.  
 Bieriinger, R. ed. *The Corinthian Correspondence* (Leuven: Leuven University Press, 1996).  
 Breytenbach, C. *Versöhnung. Eine Studie zur paulinischen Soteriologie* (WMANT60; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989).  
 Bultmann, R. *Theologie des Neuen Testaments* (9.Aufl. durchgesehen und ergänzt v. O. Merk; Tübingen: Mohr, 1984).



- Burke, T. J. / J. K. Elliott. *Paul and the Corinthians: Studies on a Community in Conflict* (Leiden: Brill, 2003).
- J.-F. Collange, *Énigmes de la deuxième Épître de Paul aux Corinthiens: Étude exégetique de 2 Cor.2,14-7,4* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972).
- Coppens, J.( ed.). *La notion biblique de Dieu: Le Dieu de la Bible et le Dieu des philosophes* (BETHL 41; Louvain : Louvain University Press, 1976).
- Crafton, J. A. *The Agency of the Apostle: A Dramatic Analysis of Paul's Responses to Conflict in 2 Corinthians* (Sheffield: JSOT, 1991).
- Delling, G. "Geprägte partizipiale Gottesaussagen in der urchristlichen Verkündigung," ders., *Studien zum Neuen Testaments und zum hellenistischen Judentum* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1970) 401-416.
- Demke, Ch. "Ein Gott und viele Herren," *EvTh* 36 (1976) 473-484.
- \_\_\_\_\_. "Gott . Neues Testament," *TRE* 13.645-652.
- Georgi, D. *The Opponents of Paul in Second Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1987).
- Gnilka, J. *Theologie des Neuen Testaments* (Freiburg, Basel und Wien: Herder, 1994).
- Goulder, M. D. *Paul and the Competing Mission in Corinth* (Peabody, MA: Hendrickson, 2001).
- Hahn, F. *Theologie des Neuen Testaments* (2 Bände; Tübingen: Mohr, 2002).
- 原口尚彰 『パウロの宣教』 教文館, 1998 年
- Hofius, O. *Paulusstuden* (WUNT 51; 2. Aufl.; Tübingen: Mohr, 1994).
- Hübner, H. *Biblische Theologie des Neuen Testaments* (3 Bände; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990-1995).
- Käsemann, E. "Erwägungen zum Stichwort 'Versöhnungslehre im Neuen Testament'," in *Zeit und Geschichte* (FS. R. Bultmann; ed. E. Dinkler; Tübingen: Mohr, 1964) 47-59.
- Kammler, H.-Ch. *Kreuz und Weisheit* (WUNT 93; Tübingen: Mohr, 1997).
- Kim, S. "2 Cor.5:11-21 and the Origin of Paul's Concept of 'Reconciliation'," *NovTest* 39 (1997) 360-384.
- Kleinknecht, H. " 'ς," *ThWNT* 3. 65-120.
- Klumbies, P.-G. *Die Rede von Gott bei Paulus in ihrem zeitgeschichtlichen Kontext* (FRLANT 155; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).
- Lindemann, A. "Gott. . Neues Testament," *RGG*<sup>4</sup> 4.1103-1108.
- \_\_\_\_\_. "Die Rede von Gott in der paulinischen Theologie," ders., *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr, 1999) 9-26.
- Martin, R. *Reconciliation: A Study of Paul's Theology* (Atlanta: John Knox, 1981).
- Moxnes, H. *Theology in Conflict: Studies in Paul's Understanding of God in Romans* (Leiden: Brill, 1980).
- Murphy-O'Connor, J. *The Theology of the Second Letter to the Corinthians* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991).
- Richardson, N. *God in the New Testament* (London: Epworth, 1999).
- \_\_\_\_\_. *Paul's Language about God* (JSNTSup 99; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994).
- Schelkle, K. H. *Theologie des Neuen Testaments* (4 Bände; Dünchen: Patmos, 1968).
- Stuhlmacher, P. *Biblische Theologie des Neuen Testaments. Band 1 Grundlegung: Von Jesus zu Paulus* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).
- Thüsing, W. *Per Christentum in Deum. Studien zum Verhältnis von Christozentrik und Theozentrik in den paulinischen Hauptbriefen* (NTABH; 3. verarbeitete und erweiterte Aufl.; Münster: Achendorf, 1986).
- \_\_\_\_\_. *Das Wort vom Kreuz* (WUNT 93; Tübingen: Mohr, 1997).
- Vos, F. *Das Wort vom Kreuz und die menschliche Vernunft. Zur Soteriologie des 1. Korintherbriefes* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002).
- Weder, H. *Das Wort Jesu bei Paulus. Ein Versuch, über den Geschichtsbezug des christlichen Glaubens nachzudenken* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981).
- Wilckens, U. *Theologie des Neuen Testaments* (Bd.1/1-3; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener, 2002-2005).